

<実践報告>

総合的な学習の時間と他領域との関連的な指導に関する研究 —思いやりと支え合いの心を育む活動を中心として—

百瀬光一 上田市立川辺小学校

下田好行 国立教育政策研究所

Research on Related Guidance of the Integrated Study and Other Subject Area

MOMOSE Kouichi : Kawabe Elementary School, Ueda City

SHIMODA Yoshiyuki : National Educational Policy Laboratory

This research inquired into what should be of related guidance of the integrated study and other subject areas. It is proposed that related guidance can be successful after the similarities and differences of the objectives of the integrated study and those of the other subject areas were identified. This study employed activities with an emphasis on sympathy and cooperation .

【キーワード】総合的な学習の時間 他領域 関連的な指導 独自性と共通性
思いやりと支え合い

1. はじめに

筆者は小学校5年生を担当し、次のような実践を行ったので、ここに報告する。

新学習指導要領により、総合的な学習の時間では作業的な活動や体験的な活動が重要視されている。さらに、道徳教育でも体験的な活動やボランティア活動等が、特別活動においても自主的な活動や体験的な活動の重要性が指摘された。このことにより、総合的な学習の時間と、道徳や特別活動との活動内容上での境界が曖昧となった。

そこで本実践は、総合的な学習の時間と他領域との関連的な指導の在り方を追究する。題材としては、子ども達の思いやりと支え合いの心を育む活動を中心に行うことにする。今、全国の小・中学校では学級崩壊が叫ばれ、その大きな要因として、子ども達の心の問題が指摘されている。この心の問題について体験活動は重要な意味を持つ。体験活動は、子ども達の認識の深部にまで影響を与えるものであるからである。この体験活動は、今学校では総合的な学習の時間を中心に行われている。よって、この心の問題についての解決策として、新設された総合的な学習の時間でアプローチしていくことは可能である。その際に、他領域との関連的な指導を行うことにする。

2. 関連的な指導の重要性

2.1 総合的な学習の時間と特別活動の関連的指導の必要性

(1) 教師の特別活動と他教科・領域との関連に関する質問紙調査

百瀬・下田は、2002年8月に、教職員106名を対象に特別活動に関する質問紙調査を行った。これは特別活動と他教科・領域との関連に関する教師の意識を調べるために行ったものである。この調査によると、特別活動の年間指導時数が足りないと考えている教師が多いということが分かった。理由として、時間的な関係で十分な事前・事後指導ができないと考えているようである。この改善策をどうすればよいか。質問紙調査の中にも幾つか改善策が見られたが、特別活動と他教科・領域との関連的な指導を行っていけば、上記の問題が解消できるのではないかと考える。

2.2 総合的な学習の時間と特別活動の関連的な指導のモデル

(1) 総合的な学習の時間と特別活動の独自性と共通性を意識した関連的指導

山口満(1999)は、総合的な学習の時間と特別活動との正しい関係の在り方を明らかにするための道筋として、①両者の教育活動としての独自性を明らかにしその特性を生かす。②両者の教育活動としての共通性を明らかにする。③それらの上に立って、総合的な学習の時間の学習が基盤になって特別活動へと発展するという回路と、特別活動が基盤になって総合的な学習の時間へと発展する回路を明らかにするというところに求められると主張する。さらに山口(2000)は、フレッツェル(1878～1962)のテーゼを今日的な課題にたつて再評価すべきであることを指摘し、それを基に特別活動と総合的な学習の時間との有機的な関連の在り方についての解明を試みる。山口は、両者の有機的な関連の在り方として、両者のある程度のねらいや内容を認めながら、機能的に関連させるという「領域機能論」の考えを主張し、両者の独自性と共通性を明らかにした上での関連についての理論付けを行う。大上陽司(2002)は、特別活動(特に学校行事)と「総合的な学習の時間」との安易な関連によって両者の目的が十分に達成できていないという問題点を指摘し、両者のねらいの類似性や相違性を分析した上で、両者を効果的に関連付ける為の指導計画を立案・実践し、その効果を考察する。大上が分析した両者の類似性と相違性は表1、表2の通りである。

表1 特別活動と総合的な学習の時間の類似性と相違性(大上, 2002)

類似性	・自己の生き方を考える	・問題解決的な活動の重視
	・多様な学習形態、多岐にわたる活動場所	・全教職員が協力して指導
	・評価は数値化されない	
相違性	特別活動	総合的な学習の時間
	・集団活動 ・自主的, 実践的態度の育成 ・4つの内容構成	・個人の活動 ・課題 横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に

学級活動，児童会活動， クラブ活動，学校行事	合う，地域，学校の特色を生かす ・学校，地域に応じ創意工夫を生かした活動
---------------------------	---

表2 学校行事と総合的な学習の時間の類似性と相違性（大上，2002）

類似性	<ul style="list-style-type: none"> ・学校が創意工夫 ・特色ある教育，学校づくりに対応 ・教科書がない 	
相違性	学校行事	総合的な学習の時間
	<ul style="list-style-type: none"> ・集団が指導原理 ・目標，内容の下で創意工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人が指導原理 ・目標，内容は各学校で創意工夫

2.3 総合的な学習の時間と特別活動との関連的な指導の課題

(1) 総合的な学習の時間と特別活動のねらいの類似性からくる両者の区別の曖昧さ

総合的な学習の時間と特別活動は，自分の学習の生き方を考えることや，問題解決的な活動を重視したり，多様な学習形態の設定等で非常に共通点があり，ねらいや内容を共有しやすいという関係にある．このために，両者の安易な関連付けが行われている．例えば，学校行事や修学旅行等はあくまでも特別活動のカテゴリーに入る集団的自治的な活動であり，その枠内で総合的な学習の発想を生かすというように考えることが大切であり，修学旅行や学校行事の活動で展開される教科等の枠を越えた学習を総合的な学習の時間にカウントするという方法は既成の教育課程の枠組みを崩すことになるとともに，両者のねらいが十分に達成できなくなるという危険性が起こる．このような関連付けは両者のねらい及び内容をしっかりと把握していないことから生じていると言える．

(2) 総合的な学習の時間と特別活動との関連的指導の共通性と独自性

先に示した山口，大上の関連的指導の方法は，同じ考えであると捉えることができる．山口の言葉を借りれば，共通性と独自性を明確にした上での関連的指導である．問題点は，時間数のカウントと教師側の付けさせたい力である．時間数は，どの時間にカウントするかが問題である．付けさせたい力に関しては，総合的な学習の時間と特別活動の両者のねらいを明確にしないと，結局子ども達は何を学んだかが不明瞭になり，「這い回る経験主義」と言われても仕方がない総見となってしまう．よって筆者は，総合的な学習の時間と特別活動との共通性と独自性に依拠した学力モデルを作成することが重要であると考える．

(3) 共通性と独自性を明確にした学力観の必要性

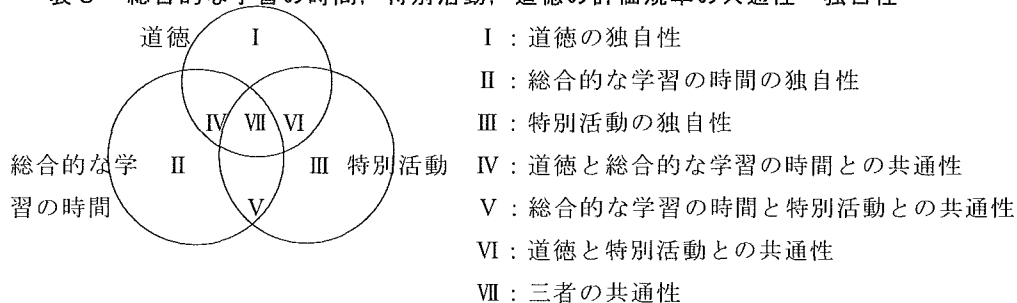
総合的な学習の時間，及び道徳，特別活動の中でも，特に現在行われている総合的な学習の時間は，イベント主義及び活動主義に陥りやすく，必ずしも子どもに付けさせたい力が明確に教師にも自覚されていないのが現状であると言える．それは，子どもにどのような学力を形成するかという評価が定まっていないことが大きな原因である．そういった意味では，2000年12月4日の教育課程審議会が新しい指導要録のあり方を答申したことはとても重要である．同答申では，総合的な学習の時間について3つの例示がされている．1つ目は，総合

的な学習の時間のねらいを踏まえ、「課題設定の能力」「問題解決の能力」「学び方、ものの考え方」「学習への主体的、創造的な態度」「自己の生き方」というような観点であり、2つ目は、教科との関連を明確にして、「学習活動への関心・意欲・態度」「総合的な思考・判断」「学習活動にかかわる技能・表現」「知識を応用し総合する能力」等の観点であり、3つ目は、「コミュニケーション能力」「情報活用能力」である。筆者は、総合的な学習の時間、特別活動、道徳との関連を図り、三者の共通性と独自性を明確にした評価を作成した。

2.4 共通性と独自性に基づく学力モデルの作成

特別活動の評価規準は、国立教育政策研究所が作成した評価規準を参考に、道徳の時間の評価規準は、小学校学習指導要領の第3章道徳第2内容の第5学年及び第6学年を参考に筆者が作成した。なお、総合的な学習の時間の評価の観点は、教育課程審議会答申の4つの観点を基に筆者が考案した。

表3 総合的な学習の時間、特別活動、道徳の評価規準の共通性・独自性



特別活動 III	総合的な学習の時間 II
① 平素とは異なる自然や文化に触れながら、互いを思いやり協力して集団生活を送ることができる。	① 教科等で学んだ経験を基に、総合的に見たり、考えたり、判断したりすることができる。
② 校外における集団活動を通して、望ましい集団生活について考え、判断することができる。	② 情報を収集・整理したり分析したりして課題を追究し、学習の過程や結果を分かりやすくまとめることができる。
③ 班活動を通して、学級の組織づくりについて理解することができる。	道徳と総合的な学習の時間 IV
④ 自然や文化に触れ、社会のマナーやルールを理解し、望ましい集団活動の在り方を理解することができる。	① 自分の課題や願いを持ち、意欲的に問題の解決に取り組むことができる。 ② 教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間で学んだ知識を生かしながら、総合的に課題解決をしていくことができる。
道徳と特別活動 VI	特別活動と総合的な学習の時間 V
① 自分達の生活の充実向上を目指し、身の回りの諸問題に友達と協力して意欲的に取り組むことができる。	① 自分の身の回りの諸問題に関心を持つことができる。
② 生活や学習への適応及び健全な生活態度を身に付け、自分のよりよい生活を目指そうとすることができる。	② 校外における体験活動を通して学習活動を充実させる方法を考えることができる。
③ クラスの一員として、友達と協力して自分達の生活の向上を目指して身の回りの諸問題について考え、判断することができる。	道徳と総合的な学習の時間と特別活動 VII
④ 生活への適応及び健全な生活を目指して、自分の課題を見出し、よりよい改善方	① 校外の自然や文化に触れながら、活動や体験に積極的に参加することができる。 ② 自分の学習の取り組み方へのよりよい適応を目指し、学習の取り組み方における自分の課題を見出し、よりよい改善方法を考え、判断することができる。

法を考え、判断することができる。 ⑤生活への適応及び健全な生活を目指し、自分の願に基づき、よりよい方法で実践することができる。 ⑥学校での学習を発展させ、教師や友達との触れ合いを深め、社会のマナーやルールを身に付けるような活動ができる。 ⑦生活や学習への適応及び健全な生活を送ることの大切さや実践の方法を理解することができる。	③討議の場等で、自分の考えを発表し、友達の考えと比較したりしながら課題追究することができる。 ④自分の学習へのよりよい適応を目指して、自分の願に基づき、よりよい方法で実践することができる。 ⑤討議やグループ活動を通して、身の回りの諸問題の解決方法について理解することができる。 ⑥自然や文化に触れ、見聞を広げる方法が分かり、学習を充実発展させることができる。
道 徳 I	
①誠実に、明るい心で楽しく生活することができる。 ②時と場をわきまえて、礼儀正しく真心を持って接することができる。 ③誰に対しても差別することや偏見を持つことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。 ④父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをすることができる。	

3. 思いやりと支え合いの心を育む学級経営

(1) 学級崩壊調査と関係づくりの必要性

1) 思いやりが育っていない子ども達

河村茂雄（2000a）の調査によれば、1990年に入ったころから、学級崩壊の情報が頻繁に入ってくるようになったと指摘している。その原因を、河村は思いやりや支え合いのある対人関係がうまく形成できず、集団に建設的に参加することが苦手な現代の子ども達の特徴として捉え、①子ども一人一人、②学級集団の状態、③学級集団と一人一人の子どもとの関係の3つの理解と対応が、これからの学級経営に必要であると述べている。また、心の教育は、社会道徳や人権を教師が説いて理解させるだけでは不十分であり、対人関係や集団での共同生活を通し、その意味や喜びを体験して初めて身に付くものであると河村（2000b）は述べている。さらに、基本的なマナーやルールが確立し、かつ学級のメンバーに思いやりや支え合いのある人間関係が存在する集団で生活することが、心の教育にとって不可欠であることも河村は指摘している。

(2) 実践を行った学級の実態

1) 学校と地域の実態

筆者が実践を行った学級が所属する長野県上田市立K小学校は、上田市の郊外にある全校児童数が606名の学校である。学校周辺は田畑が囲み、近くには川が流れ、自然環境が豊かである。また、福祉施設がいくつも隣接し、近年、それらとの交流学習も行われるようになってきている。K校の全校研究テーマは、「どの子ども自分の力を発揮し、自ら追求していく授業はどうあったらよいか。—『教える授業』から『子どもが学習する授業』へ—」である。今年度の全校研究の方向は、子どもの「良さ」や「可能性」に目を向けて研究を進めていこうと全教師の意識統一を行っている。筆者は、

個に視点を当て、よさを理解し、個への願いに配慮した授業を進めていきたいと考えている。

2)学級の実態

筆者が実践を行った学級は5年生であり、昨年度4年生の時にクラス替えを行った、今年で2年目の学級である。10月頃より学級崩壊が起こり、弱い者への集団でのいじめや友達の持ち物を隠したり、平気でカッター等で持ち物に傷を付けるということが行われていた。子ども同士が建設的に関わり合い、学級が集団として成立するために必要なスキルがどれぐらい確立されているかを知るために、河村茂雄(2001)が考案した「学級生活で必要とされるソーシャルスキル尺度」を使い、筆者は2003年4月20日に実践学級で調査した。河村によれば、大切なスキルとして「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」の2つを挙げている。実践学級の調査では、「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」のいずれの得点も低い結果であった。「配慮のスキル」「関わり方のスキル」の学級平均得点は、それぞれ50.4点、31.6点)自己中心的な児童の存在による侵害行為によって、深く傷ついている児童もあり、相手に対する配慮やかかわり方を深めるような学級経営を早急に進める必要があると筆者は分析する。

(3)総合的な学習の時間を中心とした他領域との関連的指導の在り方—思いやりや支え合いの心を育む活動を中心として—

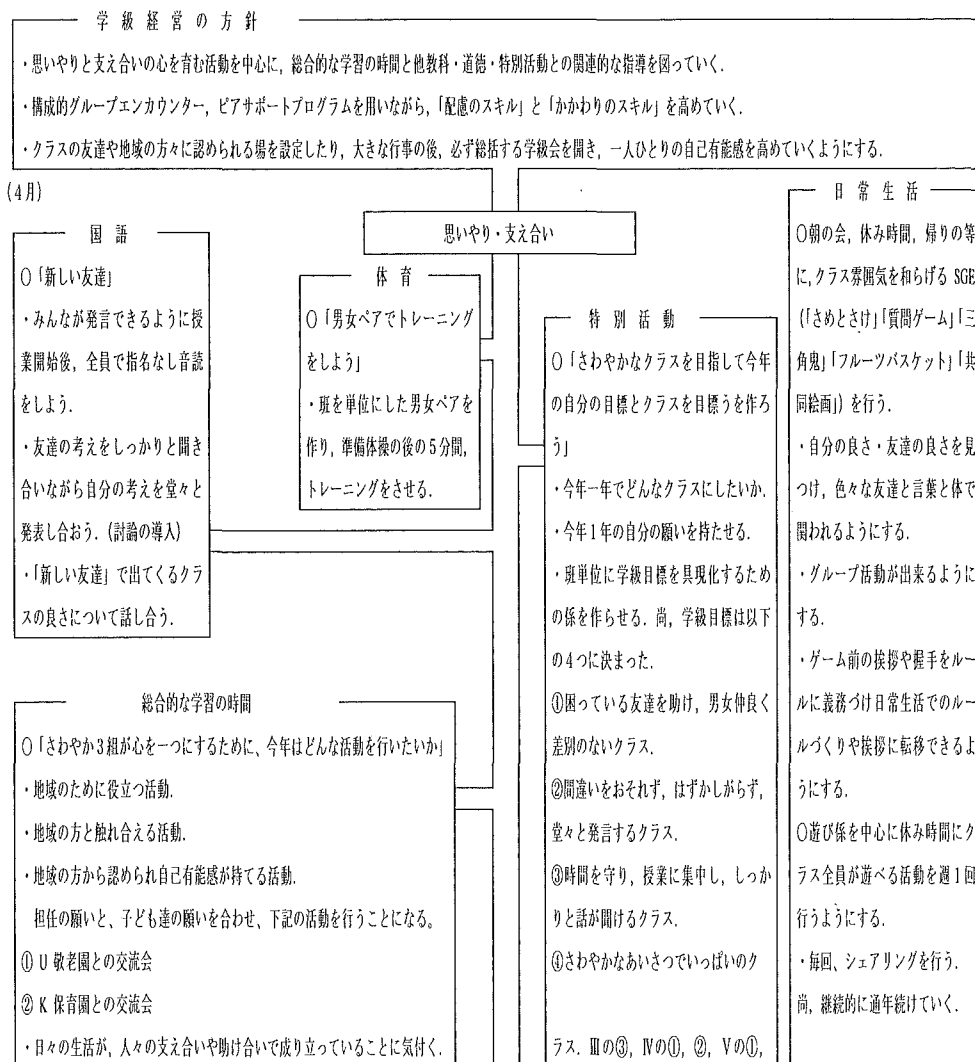
1)学級経営方針

筆者が担任として子ども達に寄せる願いは、上記の学級の実態を踏まえ、「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」を高めながら、子ども達同士のリレーションを深めていくことを基本に進めていく。また、それぞれ異なる個性を持った者同士が関わる上で必要なものはルールであり、このルールも大切に、学級の児童が自分らしさを発揮しながら学校生活が送れるようにしていきたいと考えている。河村(2001)は、「配慮のスキル」及び「かかわりのスキル」を高めるためのグループ体験(構成的グループエンカウンター)の研究を行っている。しかし、河村が研究しているグループ体験は、擬似的な体験活動に終始しており、地域に出て実際に体験活動を行うといったものではない。河村も日常生活へのこのグループ体験を転移させていくことの大切さを強調している。よって、筆者は河村らが研究しているグループ体験だけでなく、総合的な学習の時間を中心に実践的な活動の場で、「配慮のスキル」及び「かかわりのスキル」を高めるための活動を取り組みたいと考えている。具体的には、構成的グループエンカウンターで「配慮のスキル」「かかわりのスキル」を高めていき、思いやりと支え合いの心が育める活動を総合的な学習の時間と特別活動・道徳等との関連的な指導を中心に進めていく。

2)関連的指導の単元展開(1学期)の実際

総合的な学習の時間では、地域の老人福祉施設と保育所との交流活動を中心に行う。

「配慮のスキル」が欠落している自己中心的な児童や、それによる侵害行為で友達関係で深く傷ついて「かかわりのスキル」が低い児童にとっては、老人福祉施設と保育所との交流活動を通す中で、他から認められ自己満足感を味わう中で自己を見つめ直し、友達への思いやりや支え合いの心が育っていくのではないかと考えている。また、特別活動では、学校行事を中心に据え、学級の仲間同士の友情が深まるように、「クラスの宝物をつくろう」を学級スローガンに取り組みさせていくようにする。道徳では、総合的な学習の時間、及び特別活動で行う活動の動機付けや振り返りをする上で必要な題材を扱うようにする。最後に教科等については、学習の発展や深化、及び諸活動へのモチベーションを高めることをねらいに関連させる。なお、単元展開図の中の総合的な学習の時間、道徳、及び特別活動には、表3で示した評価基準も明記する。



・身近にいる幼児や高齢者の人達と共に活動する機会を通じて、温かい気持ちで接するようにする。

・交流会を計画・実行することを通して、友達と協力しながらより良い活動にするための工夫をしようとする。

・自分達の活動が認められ、自己有能感が持てるようにする。

◎彦川の清掃

・自分達の活動が認められ、自己有能感が持てるようにする。

Vの①

(5月)

— 体 育 —

○「準備体操の後のトレーニングの他に、毎回男女が手をつなぐ、手つなぎ鬼も行おう」

・トレーニングだけでなく、男女が照れずに手をつなげるような関係づくりを進める。

— 音 楽 —

○「高原学習に向けてさわやか3組が心一つにして取り組める合奏曲を決めよう」

・高原学習と平行して音楽会の練習を進めていくので、高原学習と関連性のある曲を選曲させる。

・高原学習のキャンプファイヤーでも全員がリコーダーで演奏できるようにする。

・パートリーダーを決めて助け合って練習させる。

・休み時間等も有効に使って練習させる。

(6月)

総合的な学習の時間

○「U 敬老園の方との交流会に向けて介護の学習を行おう」

・交流の前にお年寄りの方の健康チェック（表情や顔色、食欲をみること、コミュニケーションを図り体で痛い所はないかどうか知る）を行うことの大切さを学ぶ。

・自分は看護でどんな事が出来るか考えさせる。

— 体 育 —

○「さわやかリレー」

・班毎にチームを編成し、走力の差が表れないリレーを行う。（5人で1周することにし、一人ひとりの走る距離を一律にしないで走力にあった距離を分担して走るようにする。）

・班員の走力を考慮した作戦を立てさせる。

⑦の②

— 道 徳 —

○「リヤカー遠足」

・足が不自由で今まで遠足に行けなかった由美子の気持ちに共感し、由美子のためにクラスが一丸となって由美子を支え、遠足に参加させた素晴らしさを感じさせる。

・太郎山遠足に向けての意欲付けを行う。IVの①、VIの②③④

特別活動

○「遠足をさわやか3組の宝物にしよう」

・班行動の大切さを感じさせる。

・全員が目当てを持ち、助け合って太郎山に登り切る。

Ⅲの②、IVの①、VIの④、Vの②、Ⅶの①

太郎山遠足 Ⅲの②④、Vの②、VIの⑤⑥⑦

— 特別活動 —

○「太郎山遠足を総括しよう」

・遠足でさわやか3組が成長した点は何だろうか。

・次の音楽会でのさわやか3組の課題は何か。

Ⅲの②、Vの②、VIの①、Ⅶの②③⑤

— 道 徳 —

○「最近、さわやか3組のあいさつ、朝の体力づくりのマラソン、昼の清掃はどうだろうか」

・なぜ、4月当初出来ていたあいさつが最近出来なくなっているのか。

・高原学習に向けた体力づくりのマラソンは毎日出来ているだろうか。

・清掃がいい加減になっていないだろうか。

・朝の歌が歌声係の願いを受けとめ、心一つに歌えているだろうか。

Iの①、VIの②③④⑤、IVの①、Ⅶの②③④⑤

— 特別活動 —

○「さわやか3組がさらに心一つにして取り組むための実行委員会を立ち上げよう」

話し合いの結果、次の4つの実行委員会が設立される。

・あいさつ・マラソン実行委員会。

・歌声アップ実行委員会。

・掃除実行委員会。

・頑張りの木・達成の木実行委員会。

・自分がクラスのためにやってみたくらい実行委員会になれるようにする。

・班のメンバーだけでなく、実行委員会のメンバーとも関わり、交流の輪を広げるようにする。VIの①②③④⑤⑦、Vの①、Ⅶの②③⑤

— 体 育 —

○「さわやかソフトバレーボール」

・班のメンバーと協力して練習に取り組める。

・勝ち負けにこだわるのではなく、ボール運動が苦手な子が楽しくで

・寝たきりのお年寄りの介護の仕方について学ぶ。
IIの①、IVの①、Vの①

総合的な学習の時間
○「U 敬老園との第1回目の交流会の計画を立てよう」
・お爺ちゃん・お婆ちゃんと仲良くなるためにはどんなことを行えばよいか考えさせる。
・自分達を中心に考えるのではなく、お爺ちゃん・お婆ちゃんに寄り添って考えさせる。
IVの①、VIIの③⑤
○5学年が心を一つに米づくりをしよう。
・たくさんおいしいお米を収穫して、U 敬老園のお爺ちゃん・お婆ちゃんにも食べてもらえるように意欲を持たせる。IVの②、Vの②、VIIの①③⑥

U 敬老園との交流会 IVの②、Vの②、VIIの①⑥

総合的な学習の時間
○「U 敬老園との交流会を振り返ろう」
・シェアリングを行う。(どんな感想を持ったか。さらに第2回目はどんな交流会にしたいか。)
・第2回目の交流会に向けてどんなことをもって学習したいか。
IIの②、Vの②、VIIの②③⑤⑥

(7月)

音楽
○「1学期を振り返り、今の気持ちを歌に乗せて全校のみんなに伝えよう。」
・高原学習での頑張りを想起させる。
・1学期の終業式に発表するというを目標に練習させる。

さるようになる。

特別活動
○「クラス一丸となって練習し、音楽会をさわやか3組の宝物にしよう」
・音楽会プログラムのセミファイナルであることを意識させモチベーションを高めていく。
・音楽会に向けた頑張りの足跡について考えさせ自分はどんな足跡が残すことができるか。Vの①、VIの①②③④、VIIの②③④⑤

道徳
○「最近の音楽会に向けた練習の状態を振り返る」
・ひたむきに本気になって自分を取り組んでいるだろうか。・残された練習の時間をクラスとして、個人としてどんな取り組みをしていけばよいか考えさせる。
IVの①②、VIIの②③④⑤

特別活動
○「高原学習に向け、新しい班を編成しよう」
・学級目標が具現化されるための班編制の方法を考えさせる。
・やる気を発信させるために班長立候補者には方針を述べさせる。
・どんな高原学習にしたいのかクラス全体と個人の願いを持たせる。
IIIの①②④、Vの②、VIの①③、VIIの①③⑤

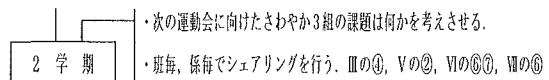
音楽会 VIの⑤、VIIの④

特別活動
○「音楽会を総括しよう」
・さわやか3組が成長した点は何だろうか。
・次の高原学習への課題は何だろうか。
IVの⑥⑦、VIIの②③⑥

道徳
○「わたしのいもうと」・いじめ・差別意識アンケートによって振り返る。・音楽会、高原学習という2つの大きな行事を平行して取り組んできた忙しい中で、自分の言動を振り返らす。
・差別は人を死に追い込む程のものだ。
Iの③、IVの①

高原学習 IIIの①②④、VIの⑤⑥、VIIの⑥

特別活動
○「高原学習を総括しよう」
・この高原学習でさわやか3組が成長した点は何かを考えさせる。



4. おわりに

以上、筆者は、総合的な学習の時間と他領域との関連的な指導を図る上で、それぞれのねらいを明確にするために、特に総合的な学習の時間と道徳、特別活動の評価規準の共通性と独自性を意識したモデル図を作成し、それを基に1学期の単元の実践を行った。その有効性として明らかになったことは、三者のねらいの独自性と共通性が明確に位置付いているために、教師の児童への指導・支援が曖昧でなく、ねらいに即した対応が行えたという点である。また、それに加え、表3で明らかにした三者の共通性のねらいの箇所(Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ)は特に、それぞれの活動の中で繰り返し登場してくるので、次第に子ども達はそれらのねらいが容易に達成できるようになってきた。例えば、子ども達の大きな行事の後のシェアリングでの発言内容等を分析していくと、次の活動や行事への課題把握がよりスムーズに行えるようになってきた。

課題としては、単元展開中の総合的な学習の時間、道徳、特別活動の中に、評価規準を明記して実践したが、それぞれの活動における設定した評価規準の数が多すぎてしまった箇所がいくつもあり、評価が煩雑になってしまったという事実が挙げられる。今後は重点を明らかにして、より絞った評価規準を設定して実践していくことが重要である。

文献

- 文部省(現文部科学省), 1998, 『小学校学習指導要領』
- 文部省(現文部科学省), 1999, 『小学校学習指導要領解説総則編』
- 河村茂雄, 2000a, 『学級崩壊予防・回復マニュアル』, 図書文化, pp.2-3
- 河村茂雄, 2000b, 『Q-U学級満足度尺度による学級経営コンサルテーション・ガイド』, 図書文化, p.16
- 河村茂雄, 2001, 『グループ体験による学級育成タイプ別プログラム小学校編』, 図書文化, pp.81-85
- 大上陽司, 2002, 『『総合的な学習の時間』との関連を図った特別活動の研究—学校行事を中心に—』『愛媛県総合教育センター教育研究集録』, 68, pp.35-38
- 山口満, 1999, 『『総合的な学習の時間』の創設は特別活動の本質を見直す契機である』, 『特別活動研究』4月号, pp.110-112
- 山口満, 2000, 『『フレッツェルのテーゼ』の今日的意義』, 『筑波大学大学院教育学研究集録』, 24, pp.7-14
- 国立教育政策研究所報告, 2002, 「評価規準の作成, 評価方法の工夫改善のための参考資料(小学校)—評価規準, 評価方法の研究開発(報告)」

(2003年4月30日 受付)